英米児童文学における「死」と「再生」を考察する

―戦後の英米の児童向け絵本、小説を通して―

藤　本　朝　巳

はじめに

この論文の目的は、戦後の英米児童文学において「死」と「再生」がどのように表現されているか、また、これらの概念が幼い子どもや児童、若い読者層にどのように受容されているか（子どもの「死の受容」）をキリスト教的見地（聖書との関連）から考察することにある。もちろんこの論文は短い論考であるので、おおまかなことを述べるにすぎないが、取り上げる作品上の「死」と「再生（復活）」について分析、検討し、今後、同様のテーマをどのように考察できるか、さらに課題とすべき事項があれば提起し、それらを解決する糸口を示したい。また周辺領域の「死生学」についても現在の日本の研究状況を記したい。

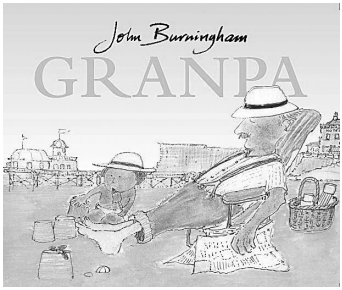
さて、英米の児童文学作品を歴史的に外観すると、一般的には、作品で「死」を取り扱うことは避けられてきた。なぜなら、子ども（特に幼い子ども）に「死」を示すことはある意味で酷なことであり、また子どもが「死」を理解することはむずかしいことと考えられていたからである。しかし、戦後まもなく、また特に1970年代以降になると、子ども向けの、さまざまなジャンルの児童文学作品において「死」を描いたものが現れるようになった。そしてそれらの作品は読者に非難されるというより、むしろ受け入れられ、さまざまな分野の識者、研究者にも高く評価されている。そこでこの論考では、大戦以前、児童文学ではタブー視されていた「死」という主題が、現在どのように子ども（若い読者）に受容されているか、またこれらの作品の文学（多義性を持ち、あいまいな表現であるが）としての意義も述べてみたい。

上記の目的を達成するために、本稿では、以下のように論じていく。第一章ではイギリスで戦後に出版された子ども向けの絵本二冊を取り上げ、これらの

作品における「死」の表現方法、また、これらの作品が幼い読者に受け入れられた理由について述べる。併せて、北欧の「死」を主題にした絵本を紹介し、「死生学」との共同研究の取り組みを記述する。第二章では、C.S. ルイス作の *The Lion, the Witch and the Wardrobe* を用いて、この作品における「死」と「再生」を新約聖書における「十字架」と「復活」を手がかりに論じたい。第三章では、アメリカのティーンエイジャー向けの小説、キャサリン・パターソンの *Bridge to Terabithia* を用いて、10歳の少女の突然の死とその少女の友人で、残された少年の再生への意志について、この作品の評価も含めて記したい。その際、パターソン自身の解説を参考に述べていく。第四章では、アメリカの小説、ラリー・バークダルの *The Mourning Dove : A Story of Love* を用いて、この作品に秘められたテーマ「死」からの「再生」について論じたい。その際、作者が若い読者に対し、いかに「死」と「再生」を提示し、若い読者が厳粛な「死」という現実をどのように受けとめ、乗り越えていくことを示そうとしているかを述べてみたい。以上を通して、児童文学における「死」と「再生」についてまとめたい。

第一章

1986年に、イギリスの絵本作家 ジョン・バーニンガム（John Burningham, 1936－ 以下、バーニンガムと記す）は、*Granpa*（『おじいちゃん』）[1] という老人の死を描いた作品を発表した。この絵本は一人の老人とその孫娘との交流をほのぼのと描いているが、一方で老人が徐々に年老いて天国に行くまでを描いている。なお、この絵本については、すでに筆者が『絵本はいかに描かれるか―表現の秘密』の第２章「何を語るか、何を表現できるか―『おじいちゃん』を素材として」（1999年）にすでに詳しく論じているので、参照されたい。ここでは概略を示すにとどめたい。



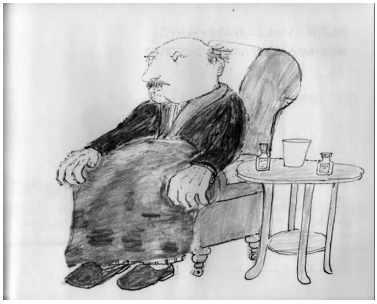
『おじいちゃん』　表紙

この絵本の主人公はおじいちゃんと６歳くらいの孫娘である。おじいちゃん

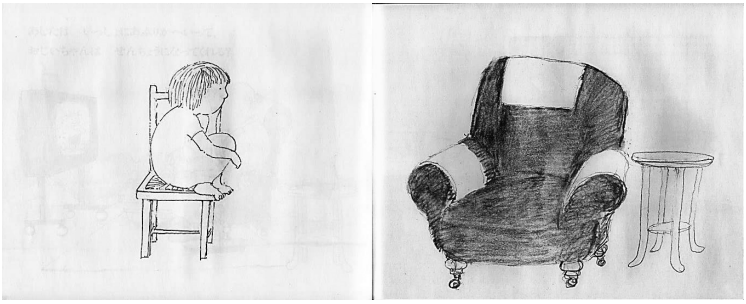
は最初元気な姿で登場する（図－１）が、季節が春夏秋冬と変わっていくごとに、次第に元気がなくなっていき、また病気がちになり、最後に天国に召される。

物語には幾重にも伏線が敷いてある。例えば、野菜を育てるビニールハウスでの場面では鉢植えの間引きがあり、「むしも　てんごくに　いくの？」という文章がある。孫娘との遊びの場面では左胸を押さえたおじいちゃんの描写があり、孫娘は看護婦さんの格好をして看護している。大雨の場面ではノアの箱舟を思わせるせりふが書いてあり、秋になると、おじいちゃんの目には力がな

図－１　元気なころのおじいちゃん



図－２　病気のおじいちゃん



図－３　孫娘と座る人のいなくなったソファー椅子

くなり、「おじいちゃんは　きょうはそとであそべない」。サイドテーブルには複数の薬の容器が描いてあり、おじいちゃんはソファーに腰かけ、ひざかけをかけて元気なく座っている（図－２）。そして、最終場面の１ページ前では、見開きページの左側ページに椅子に座った孫娘、右側ページには、誰も座って

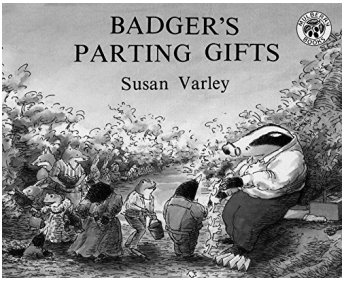
いないおじいちゃんのソファー椅子が描いてある。孫娘は座る人のいないソファー椅子をじっと見つめている。またこの場面には文章は一言もない。すなわち、おじいちゃんはすでに天国に行ってしまったことを示しているのである。孫娘の腕、背中、足は震えるような力のない線で描写してある。さらに、サイドテーブル上の薬もなくなっている（図－３）。

バーミンガムは、このような手法で老人の老い、病気、死を描いた。しかし、この絵本は死を主題にしたにもかかわらず、読者に受け入れられた。その理由の一つは、最後のページの描写にあると思われる。先のおじいちゃんの死のページの次をめくると、最後のページには右上がり（絵本のコードとしては希望の展開を示す）の丘が描いてあり、その中央に孫娘が乳母車を右上に向かって押し上げている。この場面には、彼女の下に新生児が生まれたことが暗示しているのである（図－４）。読者はおじいちゃんの死を見た後に、新しい生を見るのである。こうして「死」と「新生（再生）」を描いて物語を閉じている。

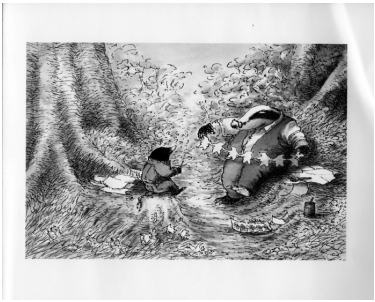
図－４　乳母車を押し上げる孫娘

Granpa 出版の翌年、イギリスではもう一冊「死」を描いた名作が刊行されている。スーザン・バーレイ（Susan Varley，1961- 以下、バーレイと記す）の *Badger's Parting Gifts*（『わすれられないおくりもの』）[2] である。

この作品では、登場者たちはすべて動物として描かれているが、実際には、この中に出てくる動物たちはみな擬人化されていて、彼らは人間のタイプを表しており、その観点からいうと、彼らは人間と見なして読むことができる。中心となる登場者はアナグマであるが、最初のページに、彼がまわりの動物たちに大変慕われており、賢くて、頼りにされていることが記されている。「こまっている友だちは、だれでも、きっと助けてあげるのです。」しかもアナグマは「もの知り」であった。



『わすれられないおくりもの』表紙



図－５　モグラに切り絵を教えるアナグマ

図－６　いなくなったアナグマを偲ぶモグラ

次のページには、アナグマは「…死んで、からだがなくなっても、心は残ることを、知っていた…」と記してあり、アナグマがまもなく死ぬことが先取りして予想される。

夜になり、アナグマは手紙を書いて、寝入ってしまい、夢を見て、その夢のなかで「…目の前には、どこまでもつづくトンネル」があり、そこを走っているうちに「ふっと地めんから、うきあがったような気がしました。」と記されている。次の日、アナグマは死んでいた。アナグマの友だちがみな集まってくる。手紙には「長いトンネルの　むこうに行くよ　さようなら　アナグマより」と書き残されていた。

図－５はモグラに切り絵を教えるアナグマを描いた場面であるが、20ページには以下のように記されている。

> みんなだれにも、なにかしら、アナグマの思い出がありました。アナグマは、ひとりひとりに、別れたあとでも、たからものとなるような、ちえやくふうを残してくれたのです。みんなはそれで、たがいに助け合うこともできました。

そして最終ページには、以下のように記されている。

> さいごの雪がきえたころ、アナグマが残してくれたもののゆたかさで、みんなの悲しみも、きえていました。アナグマの話が出るたびに、だれか

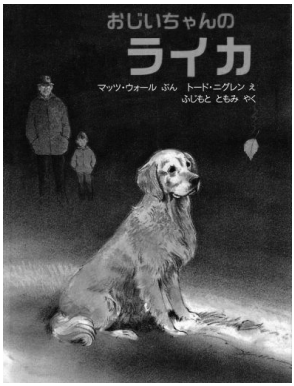
がいつも、楽しい思い出を、話すことができるように、なったのです。
…「ありがとう、アナグマさん。」

図－6は最終ページのイラストである。

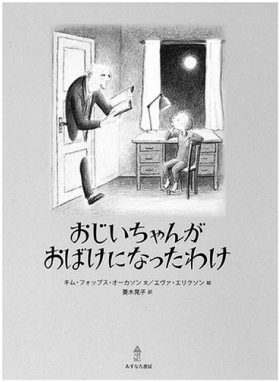
この絵本のイラストは柔らかな線と淡い水彩で牧歌的に描いてある。田園風景があたかも古き良き時代を思わせるような描写である。小さな村が舞台で、アナグマ（村の長老）は、優しく暖かで、物知りで親切であり、動物たち（村民たち）はみな彼を慕っていた。その人が天国に旅立った後、みなは彼の思い出を胸に生きていく。

この作品には死は別れであるものの、残された人々に豊かさと懐かしさと暖かな思い出を残すのである。こうして、バーレイは絵本で子ども向けに「死」を表現し得たのである。死は別れであり、寂しくもあるが、しかし、亡き人は人々の心の中に生き続ける「新生（再生）」であり、美しい暖かな思い出を追想させる作品として、今なお多くの読者に親しまれている。このメッセージは子ども読者にもよく理解できるものであろう。

同じように「死」をテーマにした海外の絵本を参考に挙げると、スウェーデンでは1989年に、*Farfars Lajka*（『おじいちゃんのライカ』）[3]という作品が出版されている。幼稚園児であるマシュウと、親が働いている間、彼を預かってくれている祖父は一匹のゴールデン・レトリバーのライカを飼っている。賢く



『おじいちゃんのライカ』表紙



『おじいちゃんがおばけになったわけ』表紙

て行儀のいい犬である。少年は毎日一緒に森や草原を散歩していたが、ライカが歳を取っていき、重い病気になってしまう。マシュウは人生には悲しみというものがあることを学んでいく。この絵本は病気で苦しむ犬を病院で安楽死させるところで物語が終わる。しかし、最後のページには、庭の真っ白な雪の中に柳の木は冬でも緑色をしていると記されていて、やはり命は生き続けることが暗示されている。

デンマークでも2004年に*Så blev farfar et spøgelse*.（『おじいちゃんがおばけになったわけ』）[4]という「死」をテーマにした作品が出版されている。この絵本は天国に行ってしまった祖父が、孫に会いに来る物語である。少年エリックの大好きな祖父が、ある日、心臓発作で死んでしまう。エリックは、悲しくて泣いてしまう。ところが、死んだはずの祖父が、夜になると、おばけになって少年のもとに現れるようになる。祖父は何か忘れ物をしているようで、少年と祖父はそれが何であるか調べることになる。祖父は生きていたときのいろいろなことを思い出し、孫に話して聞かせる。しかし、忘れ物の内容がなかなか思い出せない。二人が思い出を話し合っていくうちに「わしは、おまえに、さよならをいうのを、わすれていたんだ。いちばんだいじな、まごのエリックにね。」と語り、そして祖父は「わしは、もうすぐ、ばあさんにあえるだろう。」と言って去って行く。亡くなった祖父を懐かしく暖かに描いた作品で、日本では2005年に海外翻訳絵本として第１位にランクされている。

なお、北欧の児童文学を研究している田辺欧は、その研究報告書「死生観の文学空間―現代北欧児童文学における「死」の語り」（田辺欧）[5]において、以下のように述べている。

> 北欧文学において「死を語ること」は古来普遍的なテーマとして扱われてきた。その最大の根拠は、北欧神話における闇からの世界創造である。即ち北欧の世界観、死生観は闇（死）が起点であり、同時に終点となっていることが最大の特徴である。「死」は「生」の終結点ではなく、「生」が一時的に休止するもの、「生」に交替するものとして位置づけられてきた。西欧19世紀ロマン主義においては、「子どもは永遠不滅」であり、同時に「子どもに死を語ることもタブー」とされていた。当時、そのタブーを最初に

打ち破ったのが、児童文学の先駆者アンデルセンである。（中略）アンデルセンが作品の創造過程において決して蔑ろにしなかった「子どもの死の受容」というテーマが現代北欧児童文学において今なお継承されている…（研究課程で）不可分にできない課題が、北欧社会全体において為されている、子どもの「死の受容」をめぐる活発な社会的議論との連関性であった。（下線及び（　）は筆者による）[6]

なお、田辺は『おじいちゃんがおばけになったわけ』の作者Kim Fupz Aakeson（キム・フォップス・オーケソン）を訪問し、作家自身の死生観、子どもに死を語ることの意義、デンマーク学校教育になどについてインタビューを行っている。田辺は、このインタビューについて以下のように報告している。

この絵本はまさに「子どもに死を語る」ことをテーマにした作品である。その作家から「子どもに死を語ることの社会的意義」について直接インタビューすることが実現し、氏の作品の多くにおいて自身の死生観が如実に投影されていることが検証された。作家自身の実人生、実体験から「死を語ることは生を語ること」、「年齢の如何に関わらず、子どもに生の真実を伝えることは重要であること」、死生学という専門学問には通じていなくとも、「一人の作家として“子どもと死”の問題や関連する社会活動（デンマークにおける子どもホスピスの立ち上げ運動）に積極的に関わっていること」などを聴取できたことは、「死の受容をめぐって市民レベルにおける社会的議論が押し進められている北欧の一側面を看取することができたと言えよう。

北欧の児童文学を「死」という観点から研究している田辺らの研究は、今後、英米児童文学での研究においても大いに参考になると思われる。

第二章

第一次、第二次世界大戦は、人類史上もっとも悲惨な世界戦争体験であった。

世界各地の戦場で多くの人々が戦死し、また空爆などで驚くべき数の一般市民も亡くなった。もちろん歴史を遡れば、伝染病や自然災害で一挙に多くの人々が死亡することはあった。しかし、この悲惨な戦争は人々の「死」と「苦しみ」に対する恐怖感を強め、人の欲や罪深さという事実に対する認識を一変させた出来事であった。

大戦後、さまざまな国々で戦争の酷（むご）さを描いた作品も数多く描かれたが、戦争を起こしてしまう人間の罪深さとその罪は贖わなければならないということは、児童文学でも重要なことと見なされた。イギリスのC.S. ルイス（Clive Staples Lewis 1898-1963、以降、ルイスと記す）は、彼自身、第一次世界大戦に従軍しており、戦争の非人間的な酷さを実際に体験した人物である。彼は1950年、７作のシリーズになる「ナルニア国ものがたり」の出版を始めた。この物語シリーズは、もちろん、その刊行の目的は第一に読者を楽しませることにあるが、一方で、ルイスには確かな意図があったに違いない。この稿では第一作の『ライオンと魔女』[7]について、彼の意図を記したい。

『ライオンと魔女』は四人の兄弟姉妹がナルニアという異世界に入り、白い魔女（悪の権化）を打ち倒し、ナルニアに平和と安全を取り戻す物語である。しかし、ルイスは武力によって悪を倒すということを中心に描いたのではない。むしろ、物語に登場するアスランというライオン（イエス・キリスト）が自らの命を捧げることによって、そして死から復活することによって、すなわち、その贖いを通して罪を犯した少年エドモンドが悔い改めること、新しい生き方をしようと生まれ変わることが重要なメッセージとなっている。

ところでルイスは、さまざまな機会に、この物語はキリスト教のアレゴリーとして描いたものではないと述べてはいるが、物語そのものは、明らかにアスラン（イエス・キリスト）の贖いの「死」と「復活」を通して、人の罪を贖うことを描いているといえる。（ルイスは他にも児童文学作品などを執筆しているが、彼の児童向けの著作内容の動機や目的を知るには、彼の宗教著作集を読むことでより理解できる。）[8]

ところで、ファンタジーはその源を太古の世界にさかのぼり、伝承文芸と深いつながりがある。アメリカの民俗学者、D. L. アシュリマンは、その著書『フォーク＆フェアリーテール』[9]で、以下のように述べている。

> 地球上では、あらゆる社会、すべての時代に、おはなしが語られてきた。あるものは口承で、また宗教的な儀式の一部として、あるものは教育上、そして純粋にエンターテイメントとして語られてきた。このような物語は、わずかな例外を除いて、つきつめると二つに分類できる。一つはフィクションと認められる物語である。すなわち、それはファンタジーの所産であり、新しい世界を創造するものであり、作られた話である。それゆえ、伝承の物語は私たちのフラストレーションや恐れを解消することができるし、また希望や夢を見渡せる高台となるものでもある。もう一つは、教示する物語であるが、その目的は楽しませるためのものである。（p. 1、翻訳は筆者による）

このことばから、人が物語を語り続けてきたことの理由を了解できる。人は生きるために物語を作り、語り、伝承し、大切なことを教える（教育する）ことが必要だったのである。しかし、ルイスの紡ぎ出したファンタジー物語が児童文学としてふさわしい物語であったのには以下のような理由があると思われる。

ファンタジー文学は、その起こりと進展の過程からいえば、いわゆる主流の伝統的な文学（リアリズム文学）ではなく、反主流の文学であった。それゆえ、読み手の多くは主流の文学の読み手（一般的に男性、恵まれた地位にいて、教養があり、あるいは豊かで、社会組織の中心にいる者）ではなく、むしろ主流の文学の規範からは外れた読み手（女性や子ども、恵まれない地位に置かれ、教養がないとされ、あるいは貧しく、社会組織の端に追いやられた者）であった。ゆえに、その起こりからしてファンタジーは、男性中心という枠にとらわれない文学であり、また大人という視点にとらわれない文学であった。つまり多くは女性の文学、子どもの文学として発展してきたのである。当然のこととして、書き手にも女性が多かったといえる。

また、女性の書き手が多いということは、女性の読み手が増えるということであり、また子どもの読み手も増えるという現象を作り出した。これらの読者たちは、ある意味で社会の規範にとらわれず、自由な視点をもつ読者であった。当然、彼らは弱者の立場からものごとを考える人であり、社会の中心からは外

れた「異端者」であったといえる。

戦前、大戦を通して、人々が肝に銘じたことは、文明が発達することが必ずしも人を幸せにするとは限らないということであった。科学が発達するなかで、世の中は人工的に華々しく照らされているように思えたが、戦争の時代は精神的にはむしろ「闇」に閉ざされた時代であった。このような時期を過ごしたからこそ、人々はファンタジーに夢や希望を求めたのである。

ファンタジーは驚異の出来事が起こる世界である。そこでは不可能が可能になり、悪しき者が成敗され、正しき者が報われる。また男性中心であった価値観は覆され、これまで排除され、抑圧されてきた女性、子ども、また階級的、民族的に差別されてきた人々などが解放されることを一般民衆は願ったのである。それゆえ人々は、それが大量生産の空想物語とわかっていても、そこに悪しき者を成敗するヒーローを求め、リアリティの文学形式のしきたりにとらわれない奇想天外な展開を求めたのである。このような時代、人は心底、自分とは何かを探し求め（探索の旅）、また自分たちを救出してくれるヒーローを待ち望むのである。ルイスの物語は、こうした時代の要求に合致し、子どもにも理解できる物語として受け入れられたといえる。そして、物語の中心となる主題は「死」と「復活」であった。繰り返しになるが、『ライオンと魔女』のテーマはアスランの十字架である。十字架とは「父なる神の究極の愛」である。

ところで、『ライオンと魔女』は『ナルニア国物語』シリーズ七冊の最初に出版された作品で、内容の深さ、登場者の性格づけ、舞台設定、大小道具の使い方、ファンタジーとしての仕掛けなど、どれをとっても七冊中で最もすぐれた作品であるといえる。物語は、四人の兄弟姉妹のわくわくどきどきする冒険の展開を追うだけで十分に楽しむことができる。そしてアスランの権威、その行為（犠牲）は、キリスト教と結びつけなくとも、読者を十分に感動させる。

しかし、ここで、あえてこの作品をイエスの教えの寓話（アレゴリー）として読むことの意味を述べてみたい。アスランはイエスの象徴である。アスランが十字架を表すからこそ、この作品には深い意味があるといえる。ところが、作者ルイスは「『ライオンと魔女』はそもそも、雪の森を傘と包みをもって歩いているフォーンの絵ではじまった…はじめのうちは、物語がどう進展するか、はっきりした考えなどほとんどありませんでした」（p.73-74）と述懐している。ライオンにして

も、「そのころ、私はライオンの夢をずいぶんみていた」[10]から、ライオンを登場させたにすぎないと語っている。このことばを信じるなら、ルイスは、このシリーズをキリスト教のアレゴリーとして、幼い読者向けに書いていくつもりではなかったといえる。

彼は子どものころ、神について、キリストの苦難について、こう感じなければいけないといわれたとたんに、そう感じるのが難しくなったと独白している。彼は教会学校の教条的なあり方をひどく嫌っていた。事実、思春期にキリスト教から離れ信仰を回復するのは、さまざまな書物や友人との交わりを経て30歳を越えてからであった。

彼のファンタジーが子ども読者に愛される理由は、まさにこの経緯から推察できる。もしルイスが、聖書を寓意的に物語化し、教えを伝える目的で書いていたとしたら、子ども読者は、幼いころのルイス同様、物語をこれほど好きにはなれなかったに違いない。

さて、ルイスの物語の作り方において重要なことは、彼がイメージした物語を盛る形式であった。彼が「作家としての私は、自分が発表したいと思っている素材を用いて表現するに、フェアリーテールが理想的な形式に思われた」と述べているように、彼の用いた形式がフェアリーテールであったということが重要なことなのである。すなわち彼は「ファンタジーや神話は、ある読者にとってはあらゆる年齢において読むに耐える形式です…正しく用いられ、然るべき読者にめぐり会うなら、それはあらゆる年齢の読者に対して同じ力をもつ…単なる概念とか、個々の経験でなく、ありとあらゆる経験を人の感知しうる形で示す…」(p.67)[11]と記している。上記の文章のとおり、ルイスは対象として大人、子どもの区別なく物語を書いており、そして読者に、それまで味わったことのない深い経験をして欲しいと願っていたのである。

この作品の魅力は何といってもナルニア国にある。物語は四人の兄弟姉妹が、偶然にナルニアという異世界に入り込み、悪い魔女を倒し、ナルニアを回復する。しかしこの作品の隠れた、そして重要なテーマはエドマンドの裏切りと改心にあるといえる。エドマンドは子どもらしい形で悪に手を染めてしまう。兄弟姉妹の中で三番目という位置。どう頑張っても上の二人には知恵や力においてかなわない。また一番下の妹は末っ子でみんなに特別にかわいがられる。中

途半端な位置にいる彼は、何とかして兄姉妹を出し抜いて一番になりたかったのである。こうした心情は、子ども読者にもよく理解できることである。

また、彼は魔女の差し出すTurkish Delightという甘いお菓子に惑わされ、さらに調子の良いことばに騙されてしまう。彼は嘘をつき、つじつまを合わせ、自己中心の行動を兄姉たちのせいにし（責任転嫁）、失踪し、結果的に善意の人々を裏切ってしまう。彼は誘惑され、栄誉を求めるという罪に躓いたのである。

しかし寒い中で外套もなく、みじめになり、初めて事の重大さを知ることになる。エドマンドは、魔女がナルニアの住人を石に変えようとすると、「やめてください」と叫び、魔女になぐられてしまう。彼はそこに至って、自分以外のものをかわいそうに思うのである。その後、彼は縛られ、鞭を与えられる。死を持つだけの彼を魔女から救えるのは、アスランの犠牲しかなかったのである。ここにルイスが、人が改心するに重要としていた「痛み」の問題が語られている。

ファンタジーには隠された意味がある。適切なファンタジーはおもしろいだけでなく、「すべてはうまくいく」と、安心させる力も秘めている。それゆえ、この作品を楽しみ、心を動かされた読者は、それを神の恩寵と自然に感謝して受け入れることができるのであろう。

『ライオンと魔女』の中で、誰もが最も美しいと思う場面は第二章のフォーンの改心の場面である。小市民であるフォーンは、最初は魔女を恐がり、末っ子のルーシィを魔女に引き渡そうとした。しかし、彼は悔い改め、ルーシィに罪を告白し、赦しを乞う。そしてルーシィとフォーンは一緒に再出発する。人は罪を犯しても、我が罪を自覚し、悔い改めるなら、神の愛によって赦され、再び正しい道を歩むことを許される。「赦し」と「改心」、そして神への「信頼」こそが、この物語を気高い作品にしているといえる。

第三章

その後、アメリカでも「死」と「再生」をテーマにした優れた作品が出版された。キャサリン・パターソン（Katherine Paterson，1932- 以降パターソンと記す）[12]の『テラビシアにかける橋』（1977年）[13]はそれまで児童文学ではあまり触れなかっ

た「死」と「再生」を真正面からテーマにした作品であり、パターソンはこの作品で1978年にニューベリー賞を受賞している。

物語の舞台は保守的なバージニアの寒村、主人公は貧しい労働者一家の五年生ジェシーである。両親は閉鎖的な村に住み、子どもは五人。真ん中のジェシー以外はみな女の子である。ジェシーは日々牛の搾乳をさせられ、小学校の教師たちは管理的で、彼は好きな絵を描いても認めてもらえず、上級生のいじめもあり、疎外感や劣等感に苛まれて孤独にすごしていた。ある日、都会から同じ歳の少女レスリーが越してくる。彼女の両親は教養ある文筆家、田舎暮らしを求めて引っ越してきたのであった。都会育ちのレスリーは知恵も勇気もあるが、よそ者の彼女は小学校では浮いてしまう。そんな二人はある出来事を通して親友となり、森の中に二人だけの秘密の王国（隠れ家）を作る。ところが、イースターも近い季節、大雨が降り、川床の水嵩が増える。ジェシーが憧れの女性教師に誘われて美術館に行っている間に、レスリーは一人だけで川を渡ろうとして溺死してしまう。

パターソンはエッセイ集 *Who am I? : exploring what it means to be a child of God*.[14]という本に、

> *Christians believe that God is the God of creation*, but when we take a close look at nature, it seems unpredictable and often cruel. For those of us who have learned from babyhood that God is our "loving heavenly Father" who cares for even the smallest sparrow, natural disasters are hard to explain. If God created nature, can't God keep these occurrences in nature from hurting living creatures?
>
> Surely there are times when we find ourselves asking the question "How could God let this happen?" I remember very well asking it myself.（p. 3）

と述べ、『テラビシアにかける橋』は、パターソンの実子デビッドの友人リーサ・ヒルという少女が、ある時雷に打たれて死んでしまい、息子も自分も深く悲しみ、その出来事をもとに心の苦しみを乗り越えるために書いたと記している。

彼女は

「私は答えが出ないように思われる悲劇のうちに意味を見出そうと、自分なりに息子に話したかったのです…神さまを知る、たった一つの方法は、イエスの言ったこと、したことについて知ること…神がイエスにおいて、苦しんでいる人々とともにいようとして下さったこと、今なお、そうして下さっていることは、私にとって大きな慰めです」(訳書、p.18-25より抜粋)

と記している。

さらに、パターソンは同書に「神は私たち人間を罪と苦しみが存在する世界に置くという選択をなさいました」そして「神は神の創られた世界で、私たち人間が神の創造の手伝いをすることを望んでおられ、人間が創造の協力者(パートナー)であることを意図なさっている」とも述べている。(この記述部分の要約は筆者による。)

ジェシーはレスリーの死後、彼女を一人にし、自分が彼女を死に至らせたのではないかと苦しむ。しかし悲劇の中、子どもに無関心と思っていた父親が実は自分を深く愛してくれている（いた）こと、小学校の先生が同じように悲しい経験をしていることを知り、彼はまわりの人々の温かい心づかいに気づいていく。最後に「今こそ、ぼくが動き出す時…レスリーがいないから二人分生きていくんだ…この世界を美しくいたわりのあるものにできるかどうかは、この自分にかかっている」と語らせ、意地悪な仲間からの一時的な避難所であった隠れ家テラビシアに橋を架け（他者へ心を開き)、二人以外に誰も入れなかった場に幼い妹を招き入れ（閉ざされた心を開き、また弱者をこれからは助けようとする)、ジェシーが以前とは違う存在へと再生しようと決意するところで終わる。

パターソンはこの作品を通じて、神は人間の自由と責任を取り上げてしまうことはなさらないで、創造のわざを人間を通して完成する道を選ばれたこと、しかも、神はこの不完全な世界を愛して下さり、地上にイエスを降誕させ、世界のためにイエスを十字架につけ、そして死者から甦らせ、赦しと新しい生命をすべての人に差し出して下さっていることを、子どもにもわかるような物語にして描いたのであった。『テラビシアにかける橋』は児童文学ではあまり触

れない「死」と「再生」をテーマにした優れた作品であるといえる。

第四章

20世紀の終わりに出版されたラリー・バークダルの『ナゲキバト』[15]は、「生」と「死」の尊厳と人の生き方を深く考えさせる秀作である。この作品を日本の出版社の編集者は「12歳からお薦めの本」としており、確かにティーンエイジャーなどにも理解できる内容で、若者向けの作品と位置づけてよいと思われる。物語は以下のとおりである。

主人公の少年は９歳のハニバルである。物語の冒頭で、彼の両親が交通事故で亡くなっていることが語られる。一人っ子であったハニバルは、アイダホ州に一人で暮らしている祖父のポップに引き取られる。この祖父は大変厳しい人であったが、人柄は温厚で話を上手に語る人であった。夜、祖父は孫にユーモアたっぷりに話をしてくれる。その語りは両親を失ったハニバルの寂しさを和らげてくれた。また、祖父の話には深い知恵が込められており、少年は祖父の話を通して人生というものを少しずつ学んでいく。

さて、この物語にはいくつも伏線が周到に敷いてあり、作者が物語に織り込んだ人生の厳しさや人間関係の機微を、読者は心に染み入るように読み取り、すべては結末でつじつまの合うように描かれている。

この物語にもいくつかの死と再生が語られている。最初の「死」は、野鳥の死である。好奇心旺盛な少年ハニバルは、あるとき、友人のチャーリー（父親が性悪で始終折檻され、ひどい生活を強いられている年上の少年）にそそのかされ、「ほんものの狩りに行くことを想像するとわくわく」してしまう。少年は祖父に嘘をついて、チャーリーと銃で空き瓶など撃って遊ぶ。そしてある日、ほんとうに狩りをしてみたくなり、居眠りしている祖父のポケットからこっそり銃弾を盗んで一羽のナゲキバトを撃ち殺してしまう。しかし、鳥の死骸を持ち上げたハニバルは指の間から滴る血を見て吐き気を催す。近くに巣があり、そこには二羽のひな鳥がいた。祖父に、母親鳥を撃ち殺してしまい、厳しい自然のなかで、父親鳥には一羽しか育てられないとチャーリーはいわれる。そこで、祖父は「どっちにするか、きめなさい」と命じる。祖父は痛みの伴わない

手早いやり方を教えてくれ、少年は自分で一羽を始末し、祖父と少年は一緒に母子の鳥を埋葬する。「手についた母鳥の血は、こすっても取れなかった。祖父はなにも言わなかった。」無言の教えは痛いほど胸にしみとおり、生と死が厳粛に語られている。祖父は、こうした行為のもつ意味と、人は自分が招いた責任は自分で取らなければならないこと（容赦ない自然の掟）を伝えたのだった。

続いて、ハニバルの両親の交通事故死のありさま、その結果が語られる。両親の死後、ハニバルが祖父と一緒に暮らすようになったある日、祖父はハニバルを亡くなった両親の家に連れて行く。

> Mom and Dad left nothing. At their poor, young age they had struggled just to buy this old "fixer-upper" that Dad worked on most evenings.…Twenty-nine is not a fair time to die. The weekend vacation they had planned for so long was cut short in a freak accident when their car slid out of control on an icy highway. They were to have brought me a surprise.（p.17）

両親の死後、家を離れてから初めて行った家でハニバルは「父と母が今にも入ってきそうな、入ってきて笑いながら私を抱きしめてくれそうな、そんな気がした。」（訳書、p.43）そして、両親と過ごした、さまざまな出来事を思い出す。自分の描いた絵を母がいつも褒めてくれたこと、父が平和を愛する辛抱強い人であったこと、などなど。そこで、祖父は以下のように語っている。

> "I guess it means that when you feel all alone and everything seems hopeless, there's always someone who loves you completely-someone who will never leave you no matter what you have done."
> "Like you, Pop?" I asked.
> "You know I will always love you, Hannibal," he responded, "but I've come to believe that a greater love exists than we humans often feel-a perfect love that means you would give everything, even your life, for someone else. That's the kind of love you can't repay."（p.56）

この教えがイエス・キリストの贖いと愛を語っていることは明らかである。

さて、この後に、祖父はある話をしてくれた。－あるところに農家で働く父親と二人の息子がいて、兄は働き者で、弟は怠け者であった。弟は農作業を嫌って、次の年の種を飼うために貯めてあった大事な金を全部持って家を出てしまう。そして町で放蕩を尽くし、とうとうあり金すべてを使い果し、おまけに借金までして、挙句の果てに牢に入れられてしまう。牢屋での地獄のような毎日、弟は自分ではどうすることもできず、牢獄から父に手紙を書く。すると、兄が自分の畑と乳牛を売り払って、弟を迎えに来て、弟の代わりに借金を払い、牢から出してくれる。「さあ、自由になったぞ。家に帰ろう」。

この話は新約聖書の「放蕩息子のたとえ」[16]をもとに書かれた物語に違いないが、この場面の最後に、祖父は以下のように孫に伝える。「…ハニバル、これほどの恩は、返そうと思っても返せるものじゃないよ。できることといったら、いつまでもそのことを忘れないで、まえよりましな人間になろうと努力することだけだ」。（訳書、p.62）

続いて、再び、自然界の厳しい「死」が語られる。第５章「オスカル」も少年にとって生きものの死を厳粛に受け止めざるを得ない事件であった。７月のなかばのある週末、ハニバルとチャーリーは、近所の夫妻が留守の間、ある農場の世話を頼まれる。二人が遊びに夢中になって油断した隙に、仔牛のオスカーが畑に入ってしまい、アルファルファーのやわらかい葉を食べてしまう。気付いたときには、その仔牛の腹がかなりふくらんでおり、大変な事態になってしまう。牛はげっぷができないから、胃袋にガスがたまってしまったのであった。やがて仔牛は苦しみ出し、暴れ始める。致し方なく祖父はナイフで仔牛の肋骨と肋骨の間に刃をあてがうと胃袋めがけて突き刺した。すごい勢いでガスと血が噴き出し、仔牛は痛がって啼き、ひどい悪臭がする。牧場主が帰って来て、「これ以上苦しませるのは残酷だ。私がやるから、坊やを連れて帰ってください」と告げるが、結局ハニバルは泣いて「…ぼくがやります」と申し出て、猟銃を渡される。少年は「オスカー、ぼく、おまえの友だちだよ」とささやいて、目と目の間を打ち抜く。こうしてオスカーの苦しみは終わった。祖父は厳しく諭す。

…I doubt that most of us really know what's best for us, anyway. Pain and consequences are part of life; that's part of being here. Without pain, life would be pointless. We should pray for God to help us understand our pain, not for him to take it away.（p.48）

最終章は圧巻の語りをしている。先の「放蕩息子のたとえ」の続きが語られるのである。牢獄から釈放してもらった弟は兄と一緒に自宅に帰還することになるが、自分のしたことが恥ずかしくて、下を向いたきり、ひとことも口をきかなかった。やがて、家に着くと、父親に顔向けできず、納屋に入り、藁に身を投げ出して泣いてしまう。そのそばで兄はカンテラを灯して弟を慰めるが、弟は良心の呵責が火箸のように胸に突き刺さり、狂ったように、カンテラをつかんで納屋の壁に投げつける。すると、古い板壁に火がつき、納屋は燃え上がり、煙でいっぱいになる。兄弟は必至で火を消そうとするが、二人とも力尽きてそこに倒れてしまう。畑で働いていた父親が気付き、納屋に駆けつける。父親が見上げると屋根が今にも崩れ落ちようとしていた。父親は家畜の飲み水を毛布にたっぷりつけ、体に巻き付けて突進していく。立ち煙るなか手探りして、やっとで二人を見つけるが、もはや息子を一人しか助ける時間がないと判断する。「どちらを生かし、どちらを死なせるのか？」

父親は息子の一人を引きずって外にでる。後ろで納屋が炎とともに崩れ落ちた。ハニバルが聞いた。「…そのお父さんは、どっちの息子を助けたの？」祖父は答える。「…いつかおまえにも子どもが生まれるだろう。よく聞いておきなさい。ハニバル。その子たちがなにをしようが、どの子のことも、おまえの命と引きかえにしてもいいくらい、だいじに思うにちがいないよ。」（訳書、p.118）

その後、ハニバルと祖父は、例の二羽から一羽を殺さざるを得なかったナゲキバトのヒナのことを話し合う。そして、祖父は答える。「下の息子だよ。ハニバル、あの父親は上の息子を納屋に置いてきたんだ」「どうして？」…「ハニバル、父親はひとつのことしか考えていなかったんだよ。息子たちが生きのびてくれるように、それしか考えなかった。それに、あの場合、どっちを愛しているかだけできめることもできなかった。…父親は愛よりも大きなもので判断した。わかるかい？　生きのびて、生きるということの貴い意味を学ばなく

てはならないのは、下の息子のほうだった。下の息子には、この世ですごす時間がもうすこし必要だった。生き方を変えられるかどうか、ためしてみるチャンスもね。」（訳書、p.121-122　下線は筆者による）

そして、最後の場面で、その下の息子というのが、実は祖父その人であったことが暗示される。今や大人になって述懐している、現在のハニバルは思い出す。「…祖父が、「人間は世界を変えようとして軍隊を動員するが、神はこの世を変えるために送ってよこされたのは、たったひとりの赤ん坊だよ」」（p.124）

あらすじのみを記したが、この物語では、突然両親を失くした9歳の少年に容赦なく生きることの試練が与えられる。人生は厳しく、祖父は時に厳しく、時に優しく、大切なことを伝えていく。最後の場面で、祖父が語ってくれた物語の全てが一本の糸のようにつながり、祖父の生きてきた過去が明かされたのであった。「死」と「再生」、すなわち、いくつもの命の尊さと現実に起こる「死」を、これほどにありありと描いて見せた児童文作品は稀である。もちろん、大人読者も十分に心動かされる物語である。

おわりに

新約聖書の「放蕩息子のたとえ」は珠玉の文学ともいえるが、その箇所の前には同じテーマのたとえ話が記されている。「見失った羊」のたとえ、「無くした銀貨」のたとえ、である。「放蕩息子」のたとえも含め、これらの箇所で聖書の伝えようとしていることは、いずれも、迷ったもの、無くしたもの、一度はいなくなってしまったもの、が見つかることの喜びである。聖書は関係する者同士が見つかったものを共に喜び、受け入れることを教えている。大事なことは、数の大小やそれまでの生き方の良し悪しではなく、これからの人生であることを教示しているのである。

児童文学で「死」を語るということは確かに難しいことであろう。しかしながら、子ども向けの文学のありようとして、今考えねばならないことは、以下のことであろう。昨今、私たちの世界では不安なことが多発している。地球的規模でいえば、温暖化の影響か、自然が損なわれて変調をきたしている。自然がおかしくなれば、結果的に人間にも被害が及ぶであろう。一方で子どもを取

り巻く状況が日に日に劣化していることは誰もが感じていることである。教育面では受験競争、落ちこぼれ、学校では仲間はずれ、いじめ、学力低下などが声高く叫ばれ、また小中高校、大学まで不登校生が増え、なかには子ども自らが行き場を失い、命を絶つ悲惨な事件も増えている。またメンタルな病をもつ人は子どもにも大人にも非常に増えている。

さらにいえば、家庭にも世間にも娯楽が満ちあふれている。マンガやアニメーションはもちろん、テレビ、ゲームをはじめとする電子機器がいたるところに設置され、携帯電話、スマートフォンやコンピュータは必需品となり、私たちは、いつでもどこでも何でも簡単にできるような錯覚に陥っている。世の中は一見便利で快適で、おもしろおかしくて仕方がないように思える。しかし、現実は深刻な事態になっている。また、この数年、自然災害が相次いで起こり、大事な人を突然失い、復旧のめども立たず、辛い思いで暮らしている方が大勢いる。

上記のような事実を考えると、困難ななかで感情をうまく制御できない子どもには共に寄り添う大人の支援、保護が必要である。子どもは、悲嘆に誠実に向き合ってくれる大人の思いやりや受容を通して、またまわりの大人が共に苦しみを担い続けることによって、他者との新たな関係を築いていくことができる。そのための取り組みとして、今後、児童文学で積極的に「死」とその「死」を乗り越えていく「再生」のありようを研究することは、今や喫緊の課題であると思われる。もちろん文学の存在理由は第一に楽しむことであり、じっくり味わうこと、そして感動することであろう。しかし一方で、世界を冷静に眺めると、文学研究の目的のひとつに、死生学など、「死」の周辺領域のさまざまな研究者たちと協力し、互いの知識や経験を共有し、研究を新たな面から深めることが必要であると思われる。今や、「死」と「再生」を、文学を通して考えることは重要な課題であるといえよう。

参考文献

一次資料

小説

・Barkdull, Larry. *The Mourning Dove : A Story of Love*. New York: Golden Books, 1997.
邦訳『ナゲキバト』ラリー・バークダル 作、片岡しのぶ 訳、あすなろ書房、2006年
・Lewis, Clive Staples. Baynes , Pauline.*The Lion, the Witch and the Wardrobe, A Story for Children* Geoffrey Bles, London:1950
邦訳『ライオンと魔女』ナルニア国ものがたり（1）　瀬田貞二 訳、1966年
・Paterson, Katherine. *Bridge to Terabithia*. New York: Thomas Y. Crowell, 1977.
邦訳『テレビシアにかける橋』キャサリン・パターソン 作、岡本浜江 訳、偕成社、1981年
・Paterson, Katherine. *Jacob have I loved*. New York: Thomas Y. Crowell, 1980.（初版の刊行年1980年　受賞年は1981年）
邦訳『海は知っていた』キャサリン・パターソン 作、岡本浜江 訳、偕成社、1985年

絵本

・Aakeson, Kim F. and Eva Eriksson. *Så blev farfar et spøgelse*. Kbh: Gyldendal, 2004.
邦訳『おじいちゃんがおばけになったわけ』キム・フォップス・オーカソン 作、エヴァ エリクソン 絵、菱木晃子 訳、あすなろ書房、2005年
・Burningham , John. *Granpa*, Jonathan Cape, 1984.
邦訳『おじいちゃん』ジョン・バーニンガム 作、谷川俊太郎 訳、ほるぷ出版、1985年
・Varley, Susan. *Badger's Parting Gifts,* Andersen Press, London, 1984.
邦訳『わすれられないおくりもの』スーザン・バーレイ 作、小川仁央 訳、評論社、1986年
・ Wahl, Mats. *Farfars Lajka*, illustrated by Tord Nygren, Carlsen if-Bokforlag, Stockholm., Sweden, 1989.
邦訳『おじいちゃんのライカ』マッツ・ウォール 作、トード・ニグレン 絵、藤本朝巳 訳、評論社、2005年

二次資料

研究書

・Coles, Robert. *The spiritual life of children*. Boston: Houghton Mifflin, 1990.
・Lewis, Clive Staples. *The Problem of Pain*, New York, Macmillan,1944.

・Paterson, Katherine. *Stories of my life*. New York: Dial Books, 2014.
・Paterson, Katherine. *Who am I? : exploring what it means to be a child of God*. Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1992.
邦訳『私はだれ？ 自分さがしのヒント』キャサリン・パターソン 著、中村妙子 訳、晶文社　2000年
・『希望の教育へ－子どもと共にいる神』レギーネ・シントラー 著、深谷潤 訳、日本キリスト教団出版局、2016年
・藤本朝巳 『絵本はいかに描かれるか－表現の秘密』日本エディタースクール出版部、1999年

研究論文

・「死生観の文学空間－現代北欧児童文学における「死」の語り」 大阪大学　田辺欧 http://riefive 6 .wixsite.com/utatanabe/untitled-ci 5 x　2016年12月22日
・「死の教育に関する人間学的研究」 立命館大学大学院　文学研究科人文学専攻　PARK SINAE（パク・シネ）http://jairo.nii.ac.jp/0026/00005484　2016年12月22日

注

1　Burningham , John. *Granpa*, Jonathan Cape, 1984.
2　Varley, Susan. *Badger's Parting Gifts,* Andersen Press, London, 1984,
3　Wahl, Mats. *Farfars Lajka*, illustrated by Tord Nygren, Carlsen if-Bokforlag, Stockholm., Sweden, 1989.
4　Aakeson, Kim F. and Eva Eriksson. *Så blev farfar et spøgelse*. Kbh: Gyldendal, 2004.
5　「死生観の文学空間―現代北欧児童文学における「死」の語り」田辺欧、大阪大学言語文化研究科
http://riefive 6 .wixsite.com/utatanabe/untitled-ci 5 x　2017年１月５日
6　この報告中には「新たな文学研究として、児童文学を「死生学」と関連づけ、その社会的意義を明らかにする。」と述べられており、「…北欧諸国においては近年、「子どもへの「死」の語り」に関連した研究は、児童文学研究所をはじめとした専門研究機関が発行する研究誌、研究フォーラム、メディア媒体（新聞・ネット上）での一般議論、ディシプリンを越えた研究者で構成されたホスピスフォーラムなどで活発に実施されている。…「文学が子どもに死を語ることの社会的意義」を的確に検証し、それら人文学的なアプローチが現代北欧社会の掲げる重要課題「子どもの人権と生命倫理問題」に主体的に参与している状況を検証し、考察する。」と記されており、英米の児童文学の研究にも大いに参考になるといえる。
7　Lewis, Clive Staples. *The Lion, the Witch and the Wardrobe, A Story for Children*, Geoffrey Bles, London:1950　なお、シリーズは７冊になり、最終刊『さいごの戦い』（*The Last Battle*）は1956年に出版されている。

8　『悪魔の手紙』、C.S.ルイス宗教著作集１　各新教出版社 *The Screwtape Letters*, 1942.
他のシリーズは以下のとおりである。
『四つの愛』、同著作集２ *The Four Loves,* 1960.
『痛みの問題』、同著作集３ *The Problem of Pain*, 1940.
『キリスト教の精髄』、同著作集４ *Mere Christanity*, 1952.
『詩篇を考える』、同著作集５ *Reflections on the Psalms,* 1958.
『悲しみを見つめて』、同著作集６ *A Grief Observed*, 1960.
『神と人間との対話』、同著作集７ *Letters to Malcolm*, 1964.
『栄光の重み』、同著作集８ *"The World's Last Night" and Other Essays*, 1960.
『偉大なる奇跡』、同著作集 別巻１ *God in the Dock*, 1970.第１部
『被告席に立つ神』、同著作集 別巻２ *God in the Dock*, 1970.第２部・第３部
9　Ashliman, D. L. *Folk and Fairy Tales - A HANDBOOK*, London: Greenwood Press, 2004.
10　Edited by Walter Hooper, *Of Other World Essays and Stories*, London: Bles, 1966.
11　注10　同書
12　パターソンはアメリカ人宣教師の娘として中国に生まれ、第二次大戦時にアメリカに帰国。大学卒業後に小学校の教師として勤めている。また、東洋に深い興味をもち、1957年から四年間自ら宣教師として日本に暮らし、日本を舞台にした作品も書いている。『海は知っていた』（1981）で再度ニューベリー賞を、1998年には国際アンデルセン賞を受賞している。
13　Paterson, Katherine. *Bridge to Terabithia*. New York: Thomas Y. Crowell, 1977.
14　Paterson, Katherine. *Who am I? : exploring what it means to be a child of God*. Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1992.
15　Barkdull, Larry. *The Mourning Dove : A Story of Love*. New York: Golden Books, 1997.
16　ルカによる福音書15章11–32節、口語訳聖書より、日本聖書協会、1954年